

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

A History of Ethnographical and Cultural Anthropological Research on the Sakhalin Ainu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 将人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009998

樺太アイヌに関する民族学・文化人類学上の研究史

田村 将人

(国立アイヌ民族博物館)

- | | |
|--------------|--------------|
| 1 はじめに | 5 1945～1975年 |
| 2 19世紀 | 6 1975～1995年 |
| 3 1901～1925年 | 7 1995年以降 |
| 4 1925～1945年 | 8 まとめ |

1 はじめに

おおよそ19～20世紀のアイヌ文化は、言語や文化の特徴から、北海道、サハリン（樺太）、千島（クリル）と大まかに3つの地域グループ、方言に分けられる（19世紀以前の記録しかない本州東北地方は不詳）。これまでの多くのアイヌ語・文化・歴史研究はいずれも、北海道アイヌを主としたものだった。それは、19世紀後半の人口で、北海道アイヌ約18,000人、樺太アイヌ約2,000人、千島アイヌ約100人と人口の割合にも関係があるだろう。

しかし、地理的に沿海州に近接するサハリンに住む樺太アイヌの文化は、サハリン北部のニヅフやウイルタ、さらには大陸のツングース系諸民族との関係が深く、一方で北海道アイヌが和人と深い関係がある。同時に千島アイヌはカムチャッカ半島につながる千島列島に暮らしていたことから、カムチャッカやアリューシャン列島の先住民との関係が深く、全員がロシア正教徒になっていたということも、北海道アイヌや樺太アイヌと異なった歴史的背景を持っている。これらアイヌの3大グループの言語・文化・歴史を巨視的に解明していくと同時に、さらに各地の中小グループについて微視的に見ていくことは、アイヌ文化研究の多様性を担保することになり、隣接する諸民族との比較研究においても有益となる。ここでは、主に、吉田千萬（吉田 1997a）や菊池俊彦（菊池編 1997）を参考にして、樺太アイヌに関する民族学・文化人類学、一部、言語学にかかる20世紀以降の研究動向をまとめる。

とりわけ、サハリンは日露の境界変動の歴史の影響が大きい。まず、日本、中国、ロシアと樺太アイヌの関係史から整理したい。17～19世紀のサンタン交易を含めると清（中国）との関わりが大きかったが、1858年愛琿条約および1860年北京条約によって現在の中ロ国境に近い形で国境が画定された。このことによってサハリンに対する中国の影響力は小さくなっていった。1855年の日露和親条約によって、日露間でサハリンの領有権が議論の俎上に上り、日本側はおおよそ北緯50度以南のアイヌの居住地が日本という主

張を繰り返し（秋月 1994: 262）、一時期サハリンの最南部に軍事的拠点築いたロシア側と対立した（麓 2017: 27-31）。1868年カラフト島仮規則によりサハリンでの日露両国の「雑居」いわゆる共同領有が確認され（榎森 2013: 1-22）、1875年樺太千島交換（サンクトペテルブルク）条約によってサハリン全島がロシア領となった。30年間のロシア統治下で流刑地としてのサハリンが作られていった。また、同条約により、約2,000人の樺太アイヌのうち、841人が北海道の宗谷を経て札幌近郊の対雁に強制移住させられた（1回目の集団としての大きな移動）。北海道において約350人が流行病で亡くなり、残った者約10人以外は、すべて1890年代から1905年にかけてサハリンへと帰還した（2回目の集団としての大きな移動）。サハリンにそのまま暮らした約1,100人は帝政ロシア領で、刑期を終えたロシア人などと隣り合わせて暮らすことになった。1905年日露講和（ポーツマス）条約によって北緯50度以南が日本領になり、樺太アイヌの居住地のすべてとニヅフやウイлтаの居住地の一部が含まれた。40年間の樺太民政署および樺太庁による日本統治下で集住、日本語教育が進められ、1932年すべての樺太アイヌは日本の戸籍に編入され、成人男性はすべて兵役に就くことになった。1945年日ソ戦争によりソ連軍が北緯50度以南を占領し、樺太アイヌのほとんどが北海道以南の地へ移住し（3回目の集団としての大きな移動）、ソ連統治下のサハリンには数十人が残ったと推測される（田村 2008b: 479）。よって、1945年以降の樺太アイヌに関する調査は、サハリンではなく日本国内で行われたものと言える。サハリンは、1991年ソ連からロシアに継承され現在に至る。これらの境界変動がサハリン先住民族（樺太アイヌ、ニヅフ、ウイлта等）の生活に与えた影響は大きい。

樺太アイヌに関する民族学・文化人類学的な調査研究は、時代によりロシア語／日本語文献の比重が変わり、また樺太アイヌの移住の歴史により場所がサハリン／北海道なのかが大きなファクターとなっている。

なお、本論文では、地理的な島名はサハリンとし、アイヌ民族の地域グループとしては樺太アイヌという呼称を用いる。樺太（カラフト）という地名がアイヌ語北海道方言のカラフト *karapto* に由来すると考えられること、また1905年以降の日本による統治が、樺太アイヌにとって1945年以降に〈故地〉サハリンを離れるほどの影響を与えたことから、かつて存在した日本の行政区域の名称である樺太を用いることとする。参考までに、博物館の展示解説文等では、「樺太アイヌ」（東京国立博物館、国立民族学博物館、国立アイヌ民族博物館等）が使われるところが多く、「サハリンアイヌ」（北海道立北方民族博物館）や、「サハリン（樺太）のアイヌ」（北海道博物館）等も使われている。

2 19世紀

樺太アイヌに関する民族学的研究が開始されるのは20世紀初頭と言えるが、それ以前

の19世紀後半に関して、いくつか興味深いものがあるので、前史としてそこから始めたいと思う。

ロシア側による記録として、1853年に南サハリンにあった日本の拠点の隣にロシアが軍事拠点を作り、その時ニコライ・ブッセが日露間で翻弄される樺太アイヌの機微を記録しており注目される（ブッセ 2003）。

いわゆる日露雑居期の1867～1872（慶応3～明治2）年、ロシアの軍医としてサハリンに勤務している間、樺太アイヌに接し多くの研究をしたM. ドプロトボルスキー（1836-1874）は、彼の死後兄によって出版されたといわれる“*Ainsko-Russkij Slovar*”（『アイヌ語・ロシア語辞典』）は、一部に他の語彙集からの収録もあるが、アイヌ語樺太方言の語彙集としては最大のものである（Доброгворский 1996）。軍医ドプロトボルスキーの『アイヌ語辞典』の序文などには、ロシア国内の博物館に収蔵される物質資料を解釈するのに役立つような情報も含まれ、北海学園大学の寺田吉孝によって数回に分けて全訳されている（寺田 1995: 75-88）。阪口諒が近年、ドプロトボルスキーの辞典に記録されたアイヌ語樺太方言や話者の分析を行っている（阪口 2021a: 43-55; 2021b: 123-133）。

ロシア人による調査については、Ch. タクサミほか『アイヌ民族の歴史と文化—北方少数民族学者の視座より』に詳しい。19世紀のロシア側の記録をまとめた便利な民族誌の集大成となっている（タクサミ／コーサレフ 1998）。

J. デイクソンは1882年、北海道対雁に強制移住させられていた樺太アイヌから得た文化・言語に関してまとめている（阪口 2020: 263-293）。

おそらく北海道対雁に移住していた樺太アイヌから収集したと考えられる資料が北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園（加藤編 2008）に収蔵されている。

3 1901～1925年

20世紀に変わるところの帝政ロシア領時代の末期、政治犯としてサハリンに流刑されたB. ピウスツキ（1866-1918）が、刑期を終えた後、帝室科学アカデミーからの依頼を受けて、樺太アイヌ、ニヴフやウイльтаなどサハリン先住民族の言語・文化調査を行った。口承文芸や民族誌等の論文のみならず、物質資料、写真資料、音声資料など多岐にわたる資料を残した（沢田 2020）。1980年代以降、ポーランド、ソ連・ロシア、日本などの研究者によって国際的な共同研究が進められてきたことは後述する。

なかでも、樺太アイヌに関する代表的な著作で、27話の説話を紹介する“*Materials for the study of the Ainu language and folklore*”（Pilsudski 1998）があり、知里真志保は1940年代前半にそれらの説話をもとに補足的な調査を行って論文を発表している（知里 1973a）。藤村久和は1980年代に北海道で同様の調査をしてデータを追加している（藤村 1983: 99-119）。また、この間にピウスツキによって収集された物質文化資料で、ロシア

科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵のものについて調査が行われた（SPb-アイヌプロジェクト調査 1998）。20世紀末からピウスツキの著作集が刊行されている（Majewicz 1998）。また、彼の論文は兎内勇津流（ピウスツキ 2012: 47-62; 2013: 75-98）や井上紘一（井上 2018）によって翻訳されている。筆者を含め、ロシア語や英語で発表されたピウスツキの論文が、日本側で十分に活用されているとは言い難かったが、兎内や井上による精力的な翻訳のおかげにより、また沢田によって伝記がまとめられたことで、ピウスツキの学術的な再評価が行われるべき時が来た。20世紀をとおして発表されてきたロシア側と日本側の論文が合わせて活用されることが望まれる。

1904～1905年の日露戦争は、樺太アイヌの居住地がロシアから日本へと変更されることになり、生活の上でも大きな変化のきっかけとなった。ピウスツキはサハリンが戦場になる前に離れており、終戦後は東京において二葉亭四迷らと交流を持った（沢田 2020）。ピウスツキの論文はロシア語で書かれたものが多かったせいか、上田将や鳥居龍蔵による翻訳があるものの、日本の研究者にそれほど活用されていなかったようだ。

日本側で調査を開始したのは、東京人類学会のメンバーだった。坪井正五郎（1863-1913）、石田収蔵（1879-1940）、金田一京助（1882-1971）、野中完一らが主に1905～1911（明治38～44）年の間に集中的に調査報告を行っているのは、当時の学会の大きな関心の顕れであり、坪井らによるいわゆる日本人起源論に関わらず、日本が新たな領土を獲得したことを象徴している（吉田 1997a）。彼らが収集した物質資料は、現在、東京国立博物館（東京国立博物館 1992）や国立民族学博物館に収蔵されている。

アイヌ語・アイヌ文化研究の創始者ともいえる、金田一京助が1907年に富内で7週間もの長期滞在しての調査も、東京人類学会のメンバーと同じ時である。この時のエピソードは長らく小学校国語科の教科書に掲載されている（金田一 2004: 10-19）。金田一にとっては前年の北海道における初めてのアイヌ語調査に続くものであった。金田一はこの時の調査成果を1914年に『北蝦夷古謡遺篇』として出版している。なお、金田一はアイヌ語樺太方言が北海道方言より古い形を残しているという仮説を立てて調査に臨んでいた。基本的には弟子の久保寺逸彦や知里真志保の研究にも大きな影響を与えた。金田一はその後1915年、1929年、1935年に樺太アイヌの村落を訪れている。

また、富内に住んでいた山辺安之助が1910～1912年の白瀬蘆の南極探検に犬橿係として参加した帰途、東京で金田一は山辺に自伝を語らせ、翌1913年に『あいぬ物語』として日本語にアイヌ語樺太方言のルビを振る異色の体裁で出版された。これは、当時、先住民族が語ったライフヒストリー作品としても嚆矢である。阪口諒と田村将人が解説を付して復刻版が発行された（山辺 2021）。佐藤忠悦は、山辺安之助と白瀬蘆の関係を軸に『南極に立った樺太アイヌ 白瀬南極探検隊秘話』をまとめており参考になる（佐藤 2020）。

石田収蔵は、1907、1909、1912、1917、1939年の計5回、樺太アイヌやニヴフ、ウイ

ルタの村落を訪れており、東京人類学会メンバーの中では一番回数が多く、調査成果は『東京人類学会雑誌』等に掲載された(石田 1908a; 1908b; 1908c; 1909a; 1909b; 1909c)。とくに1912年は、東京上野で拓殖博覧会の開催に合わせて出場するサハリン先住民族を東京まで連れて行くという業務があった(小西 1998: 499-510)。多くの写真を残しており、旧蔵写真がまとめられている(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2012)。また、2000年以降、石田の資料が収蔵されている板橋区立郷土資料館では3回の展覧会が開催され、図録のほか、旧蔵はがき資料集も発行されている。このほか未刊の日記類が活用されれば、石田の研究成果がより一層明らかになるものと思われる(後述)。

鳥居龍蔵(1870-1958)は千島アイヌの民族誌を発表した後は、アイヌ文化への関心は広がらなかったと見え、樺太アイヌに関しては冬季の堅穴住居に関する記述や写真を一部掲載しているほかは目立った業績を残していない(鳥居 1976b: 311-554)。なお、鳥居は晩年の自伝で、樺太アイヌのもとを訪れた調査を1911年としており『鳥居龍蔵全集』でも継承されたが、当時発行された樺太日日新聞の記事などから実際には1912年だったことが明らかになっている(田村 2014)。鳥居はこの1912年の調査で、サハリンの北緯50度線の国境を越えて南から北へ渡っている。しかし、鳥居の本格的なサハリン先住民族に関する調査は、1921年、シベリア出兵のさなか日本軍が北サハリンを占領した際(後述)であり、結局樺太アイヌに関する調査はその後行われなかった。

葛西猛千代(1870-1951)は、1907~1911(明治40~44)年に樺太庁の先住民族担当の職員として、当時の樺太庁第一部長の出張に随行し、ほとんどの村落を回っている。1911年からは東海岸南部の富内郵便局長となった。民族学の訓練は受けていなかったものと思われるが、言語や文化に関して詳細な記述を残しており、知里真志保からの信頼も厚かったという。筆者が落帆出身の男性(1920年代生まれ)から聞いたところによると、この男性の祖父が作った犬橇が葛西を通じて当時の樺太庁博物館に納められたと記憶していたことから、富内、落帆に住んでいた樺太アイヌとの関係の深さがうかがえる。富内小学校校長の協力を得て謄写版で刊行した『樺太土人研究資料』(葛西 1975b)や『樺太アイヌの民俗』(葛西 1975a)などの著作がある。

青山東園(樹左郎)が編集した『極北の別天地』は、ばふんけ、あといざらんで、しべけんにしりの3人の樺太アイヌの首長が口述ないし説述者となっており、風俗習慣について問答形式で記録されている。同書中には、石田収蔵の論文も収められている。1918年に初版(ばふんけ他 1918)が発行され、1920年に増補5版(ばふんけ他 1920)が発行されたということが奥付に記されている。ちょうどシベリア出兵で日本軍が北サハリンを占領する直前にあたり、当時の南北サハリンへの関心の高さが本書のあちらこちらで窺える。

1918年のシベリア出兵によって、日本軍がロシアに入り込んでいたが、1920年アムール川のニコラエフスクにおいて現地住民の抵抗を受け多くの死傷者が出た。この、いわ

ゆる尼港事件への対抗措置で、日本軍は北緯50度以北の北サハリンを1925年まで占領することになった。このことにより、北サハリンに住んでいるニヴフ（当時の名称を併記する、以下同：ギリヤーク、ニクブン）、ウイルタ（オロチョン、オロッコ）、エウエンキ（ツングース、キーリン）、サハ（ヨッコ、ヤクート）への関心が高まった。鳥居龍蔵の調査はこの時に行われたものである（鳥居 1976a: 281-330）。

以上、20世紀の第1四半期を見ると、帝政ロシア領時代の最末期のサハリンに滞在したピウスツキの調査研究や、樺太庁の役人から樺太アイヌ村落に隣接した村の郵便局長になった葛西猛千代の記録を除くと、他は一時的なフィールドワークで村落を訪問した東京人類学会の研究者などであったことが特徴である。

4 1925～1945年

1925年に日ソ基本条約が締結され、北緯50度が再び国境として機能するようになる。ほぼ同時期に、「オタスの杜」と呼ばれた樺太アイヌ以外の先住民族を対象とした集住村落が樺太庁によって敷香に造成された。ニヴフやウイルタなどの人口の約半数ほどしか住んでいなかったが民族学者や言語学者がここを訪問し、サハのヴィノクーロフという反ソ連的な政治的発言を行う人物が住んでいたこともあり注目を集めた（ヴィシネフスキー 2006）。

以上のような日露・日ソ関係の影響もあり、樺太アイヌへの関心は相対的に低くなったかに見える。しかし、当時の日本領サハリン（樺太）の島内外を結ぶ航路や島内の鉄路などのインフラが整備されていったことも相まって、大規模な資料収集が行われる機会も増えていった。また、島内に居住する研究者による調査研究が行われたことで、より厚みのある記述が蓄積され、現在に続く研究の基礎が築かれた時代と言える。

山辺安之助と同じようにして北海道への強制移住とロシア領サハリンへの帰還を経験し、著書を出版した樺太アイヌに、もう一人千徳太郎治（1872-1929）がいる。千徳は、東海岸の内淵（ナイブチ）に生まれ、1895（明治28）年、再びロシア領時代の内淵に帰還していた。1903～1905年にかけての冬季に、プロニスワフ・ピウスツキがサハリン島武官知事の援助を受けて設置したアイヌ児童のための学校で教えていた（田村 2013a: 113-129）。1912（大正元）年より樺太庁が設置した「土人教育所」で教鞭をとる。そして、東海岸の村落の情報や習慣等についてまとめた『樺太アイヌ叢話』（千徳 1929）を著した。

樺太師範学校の教諭を務めた西鶴定嘉は、1928年に初めて樺太アイヌの村落を訪れて以来の調査成果を1942年に『樺太アイヌ』（西鶴 1942）としてまとめている。風俗習慣のほか、物質資料に関する説明が詳しく、とくに写真が多く掲載されていることは特筆される。西鶴にはサハリンの通史を叙述した『樺太史の栞』（西鶴 1941）がある。

樺太日日新聞の記者だった能伸文夫による『北蝦夷秘聞 樺太アイヌの足跡』（能伸 1933）は、歴史資料を交えた19世紀サハリンの歴史に関する読み物であるが、樺太アイヌから聞いたと考えられる伝説などを含んでおり興味深い。この当時は、このように民族学的な訓練を受けていない学校教諭や新聞記者も、アイヌ文化に関する著書を出していた時代であった。

昆虫を専門とする農学博士であり、考古学や民族学も幅広く専門としていた河野広道（1905-1963）は、1922年に初めて北サハリンで昆虫調査をした折に、サハ民族のヴィノクローフに会っている。1932年に南サハリンで初めて樺太アイヌの村落を訪れて調査し、翌年「樺太の旅」と題して『人類学雑誌』に調査内容が掲載されている（河野 1971b: 132-152）。この後、1937～1938年、1940～1944年と断続的に樺太アイヌやウイльта、ニヅフの村落で調査している（藤村 1984）。この間に収集された物質資料は（河野 1979）、旭川市博物館に収蔵されており現在も毎年目録が発行されている。1940年には樺太庁森林害虫調査を依頼され、1942年には北海道新聞社北方研究室長（嘱託）となり、当時収集された樺太アイヌの物質資料は現在、北海道博物館に収蔵されている。1931年に発表された「墓標の型式より見たるアイヌの諸系統」という論文では、北海道アイヌおよび樺太アイヌの墓標の型式を6つに分類して、樺太アイヌについて「西エンヂウ」と「東エンヂウ」という分類名称を便宜上、採用している。「東エンヂウ」は東海岸の樺太アイヌを、「西エンヂウ」は西海岸の樺太アイヌ、さらに北海道アイヌのうち日本海沿岸の後志地方の余市も含めている。河野は註で「東エンヂウ、西エンヂウは一般に樺太アイヌと呼ばれているが、その一部は北海道にも居住しているから、樺太アイヌという名称は適当でない」としている。なお、河野は『「エンヂウ」というのは樺太のアイヌが（東西両海岸で通用する）『アイヌ』という詞と同義に用うる語である。』（河野 1971a: 52-81）としているように、アイヌ語樺太方言の祈り詞などでカムイ（いわゆる神）に対する人間の意味で使われ、さらに和人を前にした時などにアイヌ民族を指す隠語として使われていた（田村 2008b: 496-497）。なお、差別語となったアイヌという単語を避けて、北海道でウタリ（仲間、親戚の意味）という単語が使用されてきたことと類似の例とみられる。ただ、「西エンヂウ」に含まれる北海道の余市のアイヌ語やアイヌ文化は未解明であり、墓標以外にどれほどの共通点があるのか不明である。「西エンヂウ」という地域グループの内容、名称を含めて多角的な再検討が求められている。その他、河野によって樺太アイヌに言及した多くの論文が彼の著作集に収録されている。

1933年、考古学者の伊東信雄は、東多来加貝塚の発掘調査の際、同地の樺太アイヌの家に伝来した本州製と推測される2領の挂甲を見出し、1領を持ち帰って現在東北大学が収蔵している（末永・伊東 1979）。もう1領は樺太庁博物館が所有するところとなり、現在、サハリン州郷土博物館にて展示されている。

1935（昭和10）年、アイヌ文学を専門とする久保寺逸彦（1902-1971）（佐々木 2001:

363-372) は、金田一京助や金城朝永、二谷国松とともに、各地で樺太アイヌの歌謡や口承文芸をレコードに収録し(古原 2001: 189-224)、その成果は論文「アイヌの音楽と歌謡」(久保寺 2004: 9-40)で紹介されている。久保寺の資料は現在、北海道博物館アイヌ民族文化研究センターに収蔵されている。

考古学、民族学的調査を行っていた歯科医師の馬場脩(1892-1979)は、1935~1941(昭和10~16)年の間に5回にわたり、東西両海岸のいくつかの村落で調査を行っている。収集された物質資料は、現在、市立函館博物館に収蔵され、有形民俗文化財の指定を受けている(市立函館博物館編 1971; 1974; 1976; 1977; 1978; 1979)。1937年には、第1回日本民族学会北方文化調査団、翌38年はその第2回調査に参加し、多来加で冬季の堅穴住居の調査を行っている。この時に、多来加地方における冬季の堅穴住居の詳細と、1905年のインフルエンザ流行によってそれ以来堅穴住居が使用されなくなったことを指摘している(岡・馬場 1979: 174-261)。馬場の業績は3冊の著作集と1冊のエッセイ集にまとめられている(馬場 1979a; 1979b)。また、この調査時の写真は、現在、北海道立北方民族博物館に収蔵されている(北海道立北方民族博物館編 2018)。

國學院大學の学生だった稲生典太郎(1915-2003)が1935(昭和10)年に、サハリンの東西両海岸のいくつかの村落を訪ね、東海岸の新聞や多来加で木偶を得たエピソードなどがあるが、残念ながらアジア・太平洋戦争によって資料は失われたようだ(稲生 1997)。

名取武光は、1941(昭和16)年に東西両海岸のいくつかの村落を訪問して、イナウ(木幣)とその表面の刻印について報告している(名取 1959: 43-78)。また、同時にオタスを訪問してニヅフとウイлтаの木幣と刻印についても報告している(名取 1974: 269-275)。

1936~1938年にかけて形質人類学的調査を行っていた北海道帝国大学の児玉作左衛門や伊藤昌一は、その過程で調査した身体(文身と髪型)に関する論文をまとめている(児玉・伊藤 1939; 1940; 1941; 1942)。これらの内容は、後にまとめられたアイヌ文化研究の集大成である『アイヌ民族誌』(アイヌ文化保存対策協議会編 1970)の中でも触れられている。

1939年から樺太庁博物館の主事を務め、1945年の終戦時には館長だった山本祐弘(1904-1990)は、樺太アイヌのみならずニヅフ、ウイлтаの説話を収集するなど精力的で、多くの著作を残している。山本は、戦後、大阪芸術大学教授などを歴任する建築学者であった。主に東海岸南部の白浜で調査を行っており、白浦出身の白川仁太郎、対雁を経て久春内出身のユキ夫妻、相浜出身の木村ウサルシマハがインフォーマントだった。1943年には『樺太アイヌの住居』(山本 1943b)を出版し、夏季、冬季の家屋や付属施設、家屋内の配置、一時的な狩猟や漁労の小屋などを詳述した。同時期に樺太庁豊原高等女学校教諭だった知里真志保による指導を受け、さらに同書のアイヌ語索引が作成された。知

里と山本は物質資料のアイヌ語名称を記録した「樺太アイヌ民具解説」(知里・山本 1943: 81-110)を共著でまとめている。山本は同じ1943年にウイльта、ニヅフ、エウエンキ、サハの住居や習慣を多くの写真付きで『樺太原始民族の生活』(山本 1943a)として出版している。

和田文治郎(1898-1958)は、1926年樺太庁豊原医院に勤務した後、1927年に同地を離れるが1939年に再び同医院に勤務し、樺太庁医学専門学校併設後その教授となる。同地にて知里真志保の知遇を得て、身体に関する調査を行い「樺太アイヌ語に於ける人体関係名彙」(知里・和田 1943: 39-80)をまとめる。なお、和田の知見は、知里真志保『分類アイヌ語辞典 人間篇』(知里 1975)に多く活用されていることが知られている(和田 1973: 5-8)。

北海道登別生まれで東京帝国大学の言語学科を卒業した知里真志保(1909-1961)は、姉に『アイヌ神謡集』を編集した知里幸恵、伯母に口承文芸の語り手でありローマ字でアイヌ語を筆録した金成マツを持つ家系に育った。知里は、金田一京助の教えを受け、アイヌ語・アイヌ文化研究を大きく進めた一人であり、現在に至るまで彼の著作は大きな影響力を持っている。知里は1940(昭和15)年に樺太庁豊原高等女学校の教諭として赴任し、同時に樺太庁博物館技術員(嘱託)も務めている。この間、植物に関しては当時館長の福山惟吉から教えを受け、「樺太アイヌ語植物名彙(一) — 白浜に於ける調査(上)」(福山・知里 1943: 3-37)を共同でまとめている。後に知里が『分類アイヌ語辞典 植物篇』(知里 1976)をまとめる基礎となった。なお、知里は1942年アイヌ語樺太方言を中心にまとめた「アイヌ語法研究」(知里 1973b)で、1954年に北海道大学から学位を授与されている。知里は1940年代前半に樺太アイヌのフィールドワークで得た知見をもとに、樺太アイヌが北海道アイヌより古い形を持っているという師の金田一同様の見解で、1950年代以降の北海道においてアイヌの文化史研究を展開しているが、村落の形態に関しては再検討が必要との意見もある(田村 2006: 113-128)。

多蘭泊の佐々木弘太郎(1923-1965)は、1941年以降、自身の母親から聞き取った口承文芸のノートを知里真志保に託し、知里がそれを論文の中で紹介している(知里 1953)。樺太アイヌ自身が著書を出版する例として、これまで見てきたように山辺安之助、千徳太郎治に次いで、彼は地名に関する本をまとめている(佐々木 1969)。ただ、地名の解釈等に関しては、さらなる検討を要する部分が多い。

帝国学士院が編纂した『東亜民族名彙』は広く東南アジアのみならず北はシベリア東部から南はニューギニアまでの、当時の日本軍の最大勢力範囲を網羅した民族名称の一覧である。「黒竜江流域及び樺太」の章の中で「アイヌ」のほか、「エンチャー」また「エンチャー」の項があり、「自称はアイヌ。樺太ではエンチャー、エンチャーといふ」と説明されている。(帝国学士院編 1944: 7)。当時、東京帝国大学理学部講師で形質人類学者の須田昭義が収集した資料を参照したことが序言に触れられており、おそらく前出の

河野広道の論考を参考にしたものと思われる。

以上、見てきたように、前節で紹介した郵便局長の葛西猛千代が成果を発表したのがこの時期であり、1930～1940年代は学校教諭、新聞記者、言語学者の女学校教諭、建築を専門とする博物館職員、医者など、当時の日本領樺太に住んでいた者が各地の村落に出かけていき、調査研究を行った時代であった。また、河野や馬場など、数回にわたって樺太アイヌの村落を訪れて、多くの物質資料を北海道に持ち帰った時代でもあった。そして、1945年以降は北海道において研究が継続され現在に至っている。

5 1945～1975年

1945年8月のアジア・太平洋戦争の終戦、なかんずく8月9日以降の日ソ戦は8月28日の日本軍の武装解除で終結したことで分かるように、8月15日が終戦ではなかった。和人がサハリンから北海道へ移動するのに伴い、日本国民となっていた樺太アイヌ約1,500人もほとんどが移住した(田村 2008b: 463-502)。具体的には1945年8月の緊急避難、1946～1949年の米ソによるいわゆる引揚船による移動、その後の日ソ間の帰国事業と何段階かを経ている(田村 2013b: 209-248)。1945年以降、樺太アイヌは移住先の北海道各地(おもに引揚者住宅が建設された地)に分散した(更科 1968)が、親族間のネットワークは継続していた。

1945～1949年の間は、旧日本領樺太に移住してきたソ連人(大半はロシア人)といわば共住する期間となった。樺太庁博物館を継承したサハリン州郷土博物館の初代館長となったジェレブツォフは、1949年までの間に樺太アイヌ村落を調査し物質資料を収集した(Прокофиев 2005)。また、クヴァチによる写真資料も残されており、1980年代後半以降、プロコフィエフによって論文が公開され再評価されてきた(Жеребцов 1988)。なお、サハリン州郷土博物館が収蔵するアイヌ資料に関してはプロコフィエフがまとめている(Жеребцов и Прокофиев 2012)。

前述の和田文治郎は、ソ連施政下で日本人病院勤務を命じられていたが、1947年に北海道へ移住し、1959年に亡くなるまで道内各地の保健所長を歴任した。赴任先で樺太アイヌのインフォーマントに会い、口承文芸等の記録を続けていた(和田 1999: 144; 北原編 2013, 2014)。彼の死後、息子の和田完(1933-2004)が『民族学研究』に和田文治郎遺稿「アイヌ語病名について」を発表している(和田 1964: 99-112)。

1948年には、知里真志保が「樺太アイヌの説話」(知里 1948)を『民族学研究』に発表している。翌1949年には樺太から引揚げてきた山本祐弘も「北土の神楽—南樺太におけるギリヤーク・オロッコのシャーマン」(山本 1949)を『民族学研究』に発表しており、日本側の研究者によって喪失した植民地での調査成果が同時期に発表されている。

1951(昭和26)年、知里真志保が監修者となり、北海道内に移住していた樺太アイヌ

の協力を得てNHKが樺太アイヌの歌謡、説話等を録音している（アイヌ民族博物館 1996: 57-58）。

考古学、歴史学から民族学など幅広い分野を対象としていた『北海道大学 北方文化研究報告』に掲載された論文のうち、主として樺太アイヌの文化を対象としたものを挙げる。知里真志保による「樺太アイヌの神謡」（知里 1953）。和田文治郎採録の説話を含む、知里真志保「アイヌの散文物語」（知里 1955）。1935～1939年および1945年に日本領樺太での樺太アイヌやニヴフの犬橿について、また1956～1958年北海道で行われた南極地域観測隊に関するニヴフの犬橿の調査記録である「樺太犬考」（一）（犬飼・芳賀 1957: 43-58）、（二）（犬飼・竹内・芳賀 1958: 35-52）。谷本一之（1932-2009）は北海道へ移住した樺太アイヌへのインタビューによる楽器の調査記録である「アイヌの五弦琴」（谷本 1958）を発表し、後に単著としてまとめている（谷本 2000; 2006）。同じく北海道へ移住したウイльтаやニヴフの木偶を調査した和田完「南樺太土着民における偶像」（和田 1958）、和田完「樺太アイヌの偶像」（和田 1959）。ピウスツキの論文を翻訳した和田完「プロニスラフ・ピルスツキ著 樺太アイヌのシャーマニズム」（和田 1961）が掲載された。

学校教諭を務めながら民族音楽学の調査を広く行ってきた増田又喜は、1953年から北海道各地で歌謡の録音調査を開始していた。1956年には網走市立郷土博物館館長の米村喜男衛（1892-1981）から紹介を受けて北見市常呂町で調査し、1958年にも再度調査している。自身の民族音楽学的調査をまとめて『アイヌ歌謡を尋ねて』（増田 1996）、『アイヌのふるさとに歌を求めて』（増田 2010）を出版している。

1955（昭和30）年から、東京大学の言語学者・服部四郎（1908-1995）を中心にアイヌ語の諸方言の語彙調査が開始され、樺太の諸方言を含めて『民族学研究』に発表された（服部・知里 1960）。また、それらを基にした『アイヌ語方言辞典』（服部編 1964）には樺太方言のうちライチシカ（来知志）方言が収載された。また、服部自身もいくつかの論文を発表している（服部 1961: 1-20）。なお、北見市常呂町に調査に来ていた服部のもとに、地元の経営者である大西信武が堅穴群の常呂遺跡の重要性を訴え、1957年から東京大学文学部考古学研究室が調査を開始し、1967年には教員が常駐するようになった。1973年には東京大学文学部附属北海文化研究常呂実習施設が置かれ現在に至っている。

1960（昭和35）年からは、服部に師事していた村崎恭子が、主に、来知志出身の藤山ハル（1900-1974）（村崎 1967; 1976; 1979）や、西海岸北部小田洲出身の浅井タケ（1902-1994）をインフォーマントとして言語学的な調査を行った（浅井口述、村崎編訳 1989; 1995; 1999a; 1999b; 2001）。

1960年、富田友子（歌萌）が、近藤鏡二郎のサポートを受けながら、西平ウメ、木村チカマなどから五弦琴の演奏法や曲目を記録している（富田 1965: 1-24）。近年、『西平

ウメ伝承 トンコリ楽曲集』としてまとめられている（富田 2012）。

1961～1962（昭和36～37）年には、日本放送協会（NHK）が北海道各地において歌謡の調査を行い、多くの歌や口承文芸が収録され、音源付きで『アイヌ伝統音楽』（1965）としてまとめられた。NHKは『日本民謡大観』を1952～1989年にかけて刊行していたことから、その流れの中にあっただと言えよう。収集整備専門委員会の委員として知里真志保（途中で病没）の他、詩人でアイヌ文化研究家の更科源蔵（1904-1985）が文化的な解説を書き、民族音楽学の谷本一之と増田又喜が採譜を、歌詞のアイヌ語のローマ字化は萩中美枝（1927-2021）があたった。北海道内の小樽市、豊富町、興部町、北見市常呂町、斜里町、日高町、白糠町などで採録された樺太アイヌの歌謡に関して、『アイヌ伝統音楽』の中では「カラフト・アイヌの歌謡」という一章を割いて解説されている。

更科源蔵は、NHK『アイヌ伝統音楽』調査の際に採録したと思われる口承文芸等を日本語で発表したほか（更科・更科 1976a, 1976b, 1977; 更科 1981a, 1981b, 1981c, 1982a, 1982b, 1982c）、収集した物質資料が現在の北海道博物館に収蔵されている（北海道開拓記念館 1990）。

1962年から北海道教育委員会はアイヌ文化保存対策協議会を設置し、聞き取り（民俗資料）調査、アイヌ物質資料収集（北海道博物館収蔵資料の一部と思われる）、記録映画作成などを行ってきた。大半は北海道アイヌに関するものだが、一部、映像には「北方民族の楽器」やウイльтаに関する「オロッコの郷愁」が含まれている。とくに服飾に関する調査では、報告書から詳細は省略されているものの、来知志出身の藤山ハル、白浜出身の西平ウメの氏名が挙げられており、児玉作左衛門や伊藤昌一、児玉マリ、三上マリ子によって調査が行われたことが分かる（北海道教育委員会 1968: 32）。その後、児玉マリ（1929-2017）が樺太アイヌの衣服に関して述べる内容はこの時以来の記録である。三上マリ子によってまとめられた『アイヌ衣服調査報告書（I）』にも藤山、西平両氏からの情報が掲載されている（三上 1986）。また、アイヌ文化保存対策協議会編として、1970年に『アイヌ民族誌』（アイヌ文化保存対策協議会編 1970）が出版された情報はこれらの調査、さらに執筆者のそれまでの調査内容が基になっている。

現在でも、幅広い実践的な研究をしている藤村久和は、師の河野広道とともに1961（昭和36）年に、北海道において多蘭泊出身の吉田フクに会っている（藤村 1985: 36-41）。その後、藤村は、当時勤務していた北海道開拓記念館が行った聞き取り調査の成果を『民族調査報告書』（資料編Ⅰ～Ⅲ、総集編）（藤村・平川・山田 1973a; 1973b）としてまとめており、貴重なデータとなっている。また、北海道開拓記念館（現、北海道博物館）に収蔵されている物質資料の目録が出版されている（北海道開拓記念館 1981）。藤村はその後、樺太在住時や北海道への移住時の回想をまとめた『ヘンケとアハチ』（藤村・若月編 1994）をまとめている。

1965～1969年、豊富町稚隈内や北見市常呂町で文化人類学的な調査をした大貫恵美子

(Ohnuki-Tierney, Emiko) は、藤山ハルから得た膨大な情報を“*The Ainu of the Northwest Coast of Southern Sakhalin*” (Ohnuki-Tierney 1984) として出版し、近年、阪口諒によって翻訳されている (大貫 2021)。いわゆる「記憶文化」と前置きしながらも、文化人類学者によって調査成果がまとめられた民族誌としては唯一と言って良いだろう。大貫は「文化と分類—アイヌの空間観念を例として」(大貫 1980) と題する論文を発表し、世界観や宇宙観を題材として象徴人類学的な考察を行っている。さらに、“*Illness and healing among the Sakhalin Ainu*” (Ohnuki-Tierney 1981) では、「熊の頭痛」や「タコのおでき」など動物にちなんだ病気の分類等を分析している。

1950年代以降、北海道の北見市常呂町や網走市に移住した樺太アイヌやウイльта、ニヅフは、米村喜男衛らによって網走市で開催された「モヨロ祭り」や後の「オロチョンの火祭り」に参加して舞踊や五弦琴の演奏を披露している (田村 2017: 33-37)。米村が1938年に日本領樺太で収集したものを含め、1945年以降に網走や常呂で収集された樺太アイヌの資料は、網走市立郷土博物館の収蔵資料目録 (網走市立郷土博物館 1983) として出版されており、現在は、その一部が北海道立北方民族博物館に移管され展示、収蔵されている。

1963~1965年、紋別市で開催された「もんべつ流水祭り」では北海道興部町に移住した西平ウメや北見市常呂町の数人が舞踊や五弦琴の演奏を披露している (田村 2003: 42-48)。このころの西平による伝承は、北原次郎太らによってまとめられている (アイヌ民族博物館 2006)。

山本祐弘は、樺太アイヌやニヅフなどの説話を集めた『北方自然民族民話集成』(山本 1968) や、1943年に出版した本の復刻版の『樺太アイヌ・住居と民具』(山本 1970)、さらに知里真志保との未発表稿「樺太アイヌの生活」や大貫恵美子「南樺太北西海岸のアイヌ」を含む『樺太自然民族の生活』(山本 1979; 大貫 1979) を相次いで出版している。

この時期は、1940年代前半の日本領樺太で行った調査成果を戦後の日本で発表する研究者がいる一方、1945年以降に北海道に移住した樺太アイヌから新たに情報を得て文化人類学・民族学的な調査報告を行う研究者が増えたのが特徴である。大半は日本語あるいは英語で成果が発表されている。

6 1975~1995年

この時代は、日本国内で社会運動が高まりを見せた結果、人権問題等でアイヌ民族も前面に立ったところである。同時にアイヌ文化のみならず和人の文化に関しても同様に、高度経済成長期を経て〈失われる〉文化の記録、保存、継承が謳われ、本格的に各地で動きが出てきた時代でもある。また、樺太アイヌの故地であるサハリンは、ソ連施政下に入った1945年以降日本からの自由渡航ができなかった。1985年に始まったゴルバチョ

フ書記長のペレストロイカ（社会の立て直し）、グラスノスチ（情報公開）によりソ連国内の研究にも大きな変化が起こった。サハリンを中心に樺太アイヌの関する論文が急増え、日ソ両国で研究が盛んになった時期でもある。1989年にサハリンへの渡航が自由化されるまで、日本人で渡航できるのは墓参団か石油会社の関係者に限られていた。

1978年、北海道網走市に開館した博物館「ジャッカ・ドフニ」は、ウイльта協会資料館運営委員会によって運営され、初代館長にウイльтаのゲンダース（北川源太郎）、初代副館長には金谷栄二郎（藤山ハルの娘である金谷フサの夫）が就いた。ウイльтаやニヴフ、樺太アイヌの資料を展示していたが2012年に閉館した。収蔵資料目録は2冊発行されており（田中編 1980; ウイльта協会資料館運営委員会編 2002）、現在これらの資料は北海道立北方民族博物館に収蔵されている。なお、金谷栄二郎・金谷フサ（1921-1986）夫妻らは1978年に「トンコリ 滅びの五弦琴」というレコードをCBSソニーから発表した。現在、北見市とところ埋蔵文化財センター・どきどきにて、母・藤山ハルのものを含めて北見市常呂町で制作、使用された物質資料が展示されている。いわば、1945年以降に北海道へ移住した樺太アイヌの展示がまとまって行われている唯一の例だろう。

萩中美枝は、1983年以降、当時の常呂町教育委員会から歌謡や舞踊の記録に関する依頼を受けて、金谷フサらの協力のもと調査を開始している（萩中 1984; 1985; 1986）。また、金谷からの料理に関する情報をまとめている（萩中 1992: 142-153）。

1984年、常呂町郷土研究同好会から独立する形で、常呂町樺太アイヌ文化保存会が結成された。戦後の移住先で樺太アイヌの文化伝承が組織的に行われたのはこの常呂町くらいだろう。民族差別等の理由により、樺太アイヌが多く移住した豊富町稚咲内や興部町沙留や他の地方では、文化伝承の組織化は難しかったようだ。金谷夫妻が中心となっていたほか、常呂に常駐する東京大学の教員で考古学者の宇田川洋が、萩中の調査を含めて全面的に協力して調査研究及び文化伝承の原動力となっていた。金谷栄二郎・宇田川洋の共著として『樺太アイヌのトンコリ』（金谷・宇田川 1986）と『樺太アイヌの板舟』（金谷・宇田川 1989）が、常呂町郷土研究同好会のところ文庫シリーズから出版されている。いずれも先行研究の紹介のみならず、製作法、演奏法、操作法など、技術伝承の記録に重きが置かれていることが特徴である。

1984年には、文化庁の文化財国庫補助事業で、日本民俗舞踊研究会によって常呂で舞踊の調査が行われている（須藤他 1985）。金谷夫妻や宇田川、武田修らが協力し、報告書ではアイヌ語の歌詞、楽譜のほか、舞踊譜が掲載されている。

萩中や宇田川洋・倫夫妻、畠山歌子らによる『アイヌ衣服調査報告書—樺太アイヌが伝承する衣文化』のシリーズ3冊が、1987～1989年にかけて北海道教育委員会から刊行されている。これらは、金谷フサの死去後であるが、それまでに調査していた衣服の知識や製作法をまとめたもので、衣服の展開図などが掲載されている（萩中他 1987; 1988; 1989）。これらの調査の経過に関しては『北海道東部に残る樺太アイヌ文化 I』の中で

萩中が書いている（萩中・宇田川編 1996）。金谷フサが亡くなる1986年までの、とくに晩年に多くの調査が精力的に行われ、成果が発表されていることが分かる。

このころ学際的で国際的な共同研究が進行していた。1977年に京都産業大学にポーランドから留学していたアルフレッド・マイエヴィッチが、北海道大学北方文化研究施設『北方文化研究』に論文を投稿したことがきっかけとなり、1981年にはプロニスワフ・ピウスツキが蠟管に録音した樺太アイヌの歌謡や口承文芸を再生するプロジェクトが日本とポーランドの研究者間で始まった。1982年、国立民族学博物館の館長梅棹忠夫、加藤九祚、中部大学の井上紘一、北海道大学の黒田信一郎は共同研究体制を作ることを計画し、翌83年には日本とポーランドの国際共同研究組織ICRAP（ピウスツキ未刊資料復元評価の国際委員会）を、また「ピウスツキ北方資料研究会」を日本国内で立ち上げた。1983年にはポーランドから日本に蠟管が届き、北海道大学応用電気研究所の朝倉利光・伊福部達ら（朝倉・伊福部編 1986）が劣化の進んだ蠟管から音声を復元し、言語・音楽班（浅井亨、池上二良、大島稔、萱野茂、切替英雄、佐藤知己、谷本一之、田村すゝ子、中川裕、萩中美枝、藤村久和、村崎恭子）がアイヌ語北海道方言、樺太方言、さらに民族音楽学的な検討を行った。1984年には北海道芽室町にて「樺太アイヌ古老との合宿」が4日間行われた（加藤・小谷編 1987: 209）。

大塚和義は1981年と1983年にサハリ州郷土博物館を訪問した際の情報を基に「サハリ州郷土博物館のピウスツキ資料」を発表している（大塚 1987: 131-143）。その他、国立民族学博物館の論集には、沢田和彦、和田完、佐々木史郎、萩原眞子、萩中美枝、A. スモリヤーク、J. クライナーらの論文が掲載されている（加藤・小谷編 1987）。当時、このプロジェクトはマスメディアでも大きく取り上げられ、NHKでは「沈黙の80年 樺太アイヌろう管秘話」（1984年6月25日放送、1990年ポニーキャニオンがVHSビデオテープを販売）が放送され、北海道新聞社の記者がこれらの経緯を1冊の本にまとめている（先川 1987）。ピウスツキの名が広く知られるきっかけとなり、ペレストロイカの時期と相まって、樺太アイヌの歴史や文化が再認識されるきっかけとなった。

ソ連施政下のサハリンでは、サハリ州郷土博物館を中心に、ペレストロイカが始まった1985年から樺太アイヌに関する論文の公開が盛んになった。同館職員の業績目録によると1946～1984年まではタイトルにアイヌが含まれる民族学的な論文は1件が確認されるのみで、他はあったとしても考古学的な発掘調査に関するものだった（Высоков, Высокова, и Черпакова 1991）。このことは、スターリンが死去する1か月前の1953年2月7日「（極秘）在ソ連アイヌ人についてのあらゆる情報の公刊物での公表禁止について、グラヴリート（検閲機関）命令」（稲子 2007: 91）とあることと関係がありそうである。以下、筆者のロシア語力の限界もあり、管見の限りで主な論文や書名のタイトルを挙げることで紹介にかえたい。

ヴィソーコフ他編『サハリ州住民の歴史学と民族学的研究に関する資料』（Высоков,

Ищенко, Шубин, и Шубина 1986) には, А. コスタノフ「М. М. Дроботболスキー—未公刊書簡, 報告書」, V. ラトイシェフ「B. ピウスツキの計画『サハリン島のアイヌの統治制度について』」, М. ボク「日本における『サハリンアイヌ』」などが収録されている。

ヴィソコフ他編『サハリン州郷土博物館の民族学的研究』(Высоков и Шубина 1987) には, V. ラトイシェフ「B. ピウスツキとサハリンにおけるアイヌ学校」などが収録されている。

1988年には『サハリン州郷土博物館における B. ピウスツキの民族学的コレクション目録』(Латышев и Прокофиев 1988) が発行されている。同年, 『アイヌ 歴史及び民族誌の諸問題』(Высоков 1988) が出版され, А. スベヴァコフスキー「アイヌ 歴史的及び現代的諸問題」, V. ラトイシェフ「南サハリンのアイヌに関する最初の統計資料」, А. コスタノフ「日露関係(1855~75年)における樺太アイヌ」, М. プロコーフィエフ「1945~48年の樺太アイヌ」, М. ヴィソコフと O. シュービナ「南サハリンの最後のアイヌ女性」(紹介されているのはエスニシティとしては北海道アイヌ女性), М. プロコーフィエフ「サハリン州郷土博物館のアイヌ資料目録」, T. ペンスカヤ「V. マケト 樺太アイヌのクマの霊送り儀礼」などが収録されている。

北海道とサハリンの学術交流もスタートし, 1987年には, 北海道白老町にあった財団法人白老民族文化伝承保存財団アイヌ民族博物館と日ソ極東・北海道博物館交流協会の主催で, アイヌ民族博物館を会場に, サハリン州郷土博物館とハバロフスク地方郷土博物館から資料を借用して「ソビエト連邦極東少数民族展—サハリンアイヌを中心として」が開催された(アイヌ民族博物館 1987)。その2年前には国内の物質資料で『北方民族展—ウィルタ・ニブヒ・千島アイヌ・樺太アイヌ』が開催されていた(アイヌ民族博物館 1985)。

1990年, モスクワの出版社から『アイヌとは誰か?』と題する Ch. タクサミと V. コーサレフの共著が出版された。帝政ロシア時代の多くの文献を使用し, いわばロシア語の側からわかる19世紀後半のアイヌ文化を主として, ペレストロイカ期のサハリンでの研究成果もふんだんに引用されている。本文中で, 1979年にサハリンでは民族籍をアイヌとして登録した人が3人いたことが指摘されている。なお, 熊野谷葉子によって翻訳されており(タクサミ/コーサレフ 1998), 日本語で記録された樺太アイヌの民族誌との比較検討を行う上で重要な書である。

1991年には, 「B. ピウスツキ—サハリンの諸民族の研究」と題する国際学術シンポジウムが, サハリン州の州都ユジノサハリンスク市で開催され, 日本からも多くの研究者が参加した(Латышев и Ищенко 1993)。ここまで見てきたように, ソ連末期, ペレストロイカによって日ソの学術交流も盛んになった。

1992年には樺太アイヌ史研究会が編集した『対雁の碑』が出版された(樺太アイヌ史

研究会 1992)。豊川重雄, 石井清治, 田崎勇, みかみめぐる, 小川正人らが, 1875年樺太千島交換条約によって北海道の対雁へ強制移住される経緯, そして日露戦争前後にサハリンへ帰還する樺太アイヌの足取りを多くの資料を使い明らかにした。出版の背景には, 北海道において流行病で亡くなった樺太アイヌの遺族を中心に, 1979年に江別市営墓苑にて始められた第1回樺太移住殉難者慰霊墓前祭によって, この強制移住の存在が再認識されたことにある。この墓前祭は現在でも樺太アイヌを中心に執り行われている。

1991年, 網走市に北海道立北方民族博物館が開館した。1971年に網走市が北海道知事に博物館建設を要望したことはじまり, 1986年には第1回北方民族文化シンポジウムが同地で開催され現在に至っている。網走市立郷土博物館から移管された物質資料のほか, 開館以来, 購入あるいは寄贈された物質資料の目録も多く刊行されている。1992年には第4回特別展「サハリン先住民の精神世界」が開催され, その後も樺太アイヌの物質資料が展示される特別展が多く開催されている。また, 研究紀要には収蔵資料の資料紹介「北海道立北方民族博物館所蔵の田辺尚雄氏樺太調査関連資料について(1)」(篠原・笹倉 2007)なども掲載されている。

1992年, オホーツク海沿岸の北海道紋別市で第1回シンポジウム「環オホーツク海文化のつどい」が開催された。東西冷戦時代から国境を超えた地域の視点をもって考古学や民族学に取り組んでいた紋別市立郷土博物館長(当時)の因幡勝雄(1938-2019)が発案したもので, 日ソ・日ロ国境の海に接するオホーツク海沿岸の街で東西冷戦の緊張緩和を実感する場にもなっていた。北海道大学付属図書館北方資料室と北海学園大学北駕文庫に勤めた吉田千萬は, 第4回シンポジウムで「資料に見る樺太(サハリン)」(吉田 1997b: 82-92)と題して発表し, 同時に文献目録を発行した(吉田 1997a)。第7回シンポジウムでは, 内田祐一が「MAE(ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館)所蔵の樺太アイヌ資料について」と題して, 後述の荻原真子らによる調査成果の中間報告を行っている(内田 2000: 51-63)。第8回シンポジウムでは, 田村将人が「樺太アイヌにおける犬の『供犠』」と題して発表している(田村 2001a: 75-85)。

いわば戦後50年を迎える前年の1994年には, 北海道の民放テレビ局の札幌テレビ放送株式会社(STV)の創立35周年記念として, 樺太アイヌの『ヘンケとアハチ 聞き書き 樺太での暮らし, そして引き揚げ』が出版された(藤村・若月編 1994)。藤村久和が聞き手となり, 樺太東西海岸各地の村落出身の9人の語りがトランスクリプトされ掲載されている。樺太アイヌの20世紀前半の各村落での暮らしぶりのみならず, 1945年以降の北海道への移住の経緯も語られており, まさに20世紀の歴史の語りとなっている。

この時期は, 北海道北見市常呂町を中心とした文化伝承の象徴的な動きが起こったこと, それが伝統文化の記録に留まらずに文化伝承のための手引きとなる書籍や報告書の発行という動きにつながったことが特徴的である。また, ソ連のペレストロイカによって, 日ソ間の学術交流も盛んとなり, ソ連国内でも急に樺太アイヌに関する論文, 著書

が増えたことが大きな特徴であった。

7 1995年以降

1995年、サハリン州文書館は『歴史講義 サハリン州文書館紀要』第1集として、樺太アイヌを含むサハリン先住民族に関する歴史的な公文書、私文書の史料集を発行している。ロシア国立極東歴史文書館（ウラジオストク市）が原資料を収蔵する1876年の樺太アイヌの人名簿や、ピウスツキの樺太アイヌの各村落に関する論文が掲載されている。さらに長根助八『樺太土人の生活』（1925年）の露文抄訳も掲載されているが、原典をサハリン州文書館の公文書としていることから、おそらくソ連時代に翻訳されたものだろう（Дударев 1995）。なお、第2集は1945～1947年の日ソ共住期の公文書の史料紹介が主となっている。

1994年、札幌市に開設された北海道立アイヌ民族文化研究センターは、2015年に北海道開拓記念館と統合して北海道博物館となった。研究紀要には、荻原真子の翻訳による「B. ピウスツキのサハリン紀行」（荻原 2000: 219-240）や、V. N. ヴァシーリエフ「エゾおよびサハリン島アイヌ紀行」（荻原 2004: 153-177）が掲載されている。また、荻原と古原敏弘の共著でロシアの博物館に収蔵されている魚皮衣や犬橇、クマの霊送り儀礼に関係する資料を紹介している（荻原・古原 2010; 2011; 2012）。サハリン州郷土博物館のプロコフイエフは収蔵資料の概要を掲載している（プロコフイエフ 2014）。

ロシアの5都市、6博物館に収蔵されている物質資料（大半が樺太アイヌのもの）の調査が千葉大学の荻原真子を中心とした科学研究費のプロジェクトとして1995～2002年にかけて行われた（荻原・古原 2002）。サンクトペテルブルク市にあるロシア科学アカデミー人類学民族学博物館（通称：クンストカメラ、MAE）収蔵の物質資料約1,400点の目録が出版されている（SPb-アイヌプロジェクト調査団編 1998）。続いて、同じくサンクトペテルブルク市にあるロシア民族学博物館が収蔵する物質資料約1,800点に関する目録が同様に出版されている（荻原／古原／ゴルバチョーヴァ編 2007）。これらの調査には、日本側は、出利葉浩司、福士廣志、長谷部一弘、北原次郎太、児玉マリ、古原敏弘、小泉健、小谷凱宣、村木美幸、中川裕、小川久美子、荻原真子、大谷洋一、佐々木史郎、佐々木利和、鈴木邦輝、田村将人、内田祐一、藪中剛司、吉田睦らが関わっている。

これらロシア国内の調査に先立つ、1983年以降、西ヨーロッパ、北米の各国の博物館において収蔵されている物質資料の調査がヨーゼフ・クライナーや小谷凱宣らが中心となって行われ、樺太アイヌの資料が含まれていることが明らかになった（小谷・荻原編 2004）。

1997年、北海道旧土人保護法等の廃止とともにアイヌ文化振興法（略称）が施行され、

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が開設された。北海道と文化庁の補助金によって毎年、北海道と各都府県でアイヌ工芸品展が開催されている。樺太アイヌの物質資料は毎年のように展示されているが、主なものとして、サハリン州郷土博物館の資料を展示した「サハリンアイヌの生活文化」(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 1998)、日本国内の物質資料を展示した「樺太アイヌ民族誌」(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2004)、「ロシア民族学博物館アイヌ資料展」(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2005)、「ロシアが見たアイヌ文化 ロシア科学アカデミー・ビョートル大帝記念人類学民族学博物館のコレクションより」(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2013) などがある。小谷や萩原が組織した科学研究費補助金による海外の博物館におけるアイヌ物質資料の調査の成果が、これら一般向けの展覧会で活用されている。また、資料名にアイヌ語樺太方言が意識的に採用されるようになった。なお、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構は2018年に一般財団法人アイヌ民族博物館と合併し、現在は公益財団法人アイヌ民族文化財団となって、2020年北海道白老町に開設された民族共生象徴空間(愛称:ウポポイ)の運営も担っている。

佐々木史郎は、18~19世紀、北海道、サハリン、沿海州、中国東北部を結ぶサンタン交易において、樺太アイヌを含む、様々な民族が絹と毛皮を主とした交易をおこなっていたことを単著にまとめている(佐々木 1996)。東進してきたロシアと清朝の紛争、さらに北進してきた日本との関係、その中で現在のウリチやニヴフの祖先にあたる人々が担い手となっていたが、清朝の勢力がこの地域から退くと、サンタン交易も下火になっていった。樺太アイヌの歴史や文化の研究が、ロシア語、中国語(満文档案)、日本語(古文書)をもとに、歴史学、人類学の枠を超えて展開すべきことが論じられている。

日本民俗文化資料集成のシリーズのうち菊池俊彦が編集した『北の民俗誌—サハリン・千島の民族』(1997年)には、長根助八『樺太土人の生活—アイヌ・オロッコ・ギリヤーク』(1925年)や、西鶴定嘉『樺太アイヌ』、葛西猛千代『樺太アイヌの民俗』などが再録されている。また菊池がまとめた研究史は詳細であり、本論文をまとめる際にも大変参考になった(菊池編 1997)。

ここで日本領樺太出身の和人で、いわば喪失した故郷の地方史研究として成功した好著を紹介したい。恵須取(現、ウグレゴルスク)に1929年に生まれ、1947年北海道へ引揚げ、退職後に「郷土史研究」を始めた杉村孝雄は、マイクロフィルムから樺太日日新聞の記事を博搜し、多くの資料を探索し、また絵葉書等を収集し2冊の本をまとめている(杉村 1995)。とくに第2集に収められた「樺太アイヌの送り儀礼」の章は、秋野茂樹の助言もあって、20世紀前半に行われたクマの霊送り儀礼に関する情報の集大成となっており、とくに1930年の樺太庁鉄道が割引チケットを販売して臨時列車を運行させた興行を兼ねた儀礼に関しても詳しく触れられている。他にも「樺太庁博物館」の章では、伊東信雄が報告した挂甲のうち樺太庁博物館に収蔵されたものについて詳述している(杉

村 2000)。

河野本道は、自身の還暦記念論集に収録した論文「エンチュ（カラフト＝アイヌ）の人口と居住域の推移」にて、父・河野広道がエンチュ系とした墓標が北海道余市にもあったことにも触れつつ、さらに考古学上の「オホーツク文化」（サハリン、北海道、千島列島に分布）を祖先とする可能性を指摘した上で「エンチュ系の人びとを「カラフト（樺太）＝アイヌ」と呼ぶことも適切ではないと言っている」としながらも、一般的に知られる樺太アイヌの人口統計を扱っている。この中で、1930年の人口統計で「エンチュ系」より「北海道各地出身アイヌ」の人口が多いことを指摘している（河野 1999）が、後者は史料上「北海道旧土人」とされたアイヌを指すものと考えられ、おそらくその大半は1875年に北海道へ移住しそこで日本籍に入ってサハリンへ戻った樺太アイヌを指すとみられることを指摘しておきたい（もちろん、エスニシティとしての北海道アイヌで日本領樺太への移住者もいたことは確かである）。

板橋区立郷土資料館は1993（平成5）年に石田収蔵に関する資料を受け入れて以来、小西雅徳らによって、2000年には特別展「石田収蔵 謎の人類学者の生涯と板橋」が開催されている（小西編 2000）。この展示図録では、北海道開拓記念館、北海道北方博物館交流協会に関わった野村崇による1987年以降の日ソ、日ロの共同研究を紹介、佐々木亨による「樺太先住民文化と研究・観光・展示」、佐々木利和が石田収蔵のフィールドノートを紹介した「隠れたる先達石田収蔵先生」などが掲載されている。

2004年には八戸市博物館、帯広百年記念館、板橋区立郷土資料館を会場に、国内の各博物館収蔵の物質資料を使った「樺太アイヌ民族誌」（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2004）が開催され、展示図録には、大塚和義「樺太アイヌを中心とした先住民の分布—1940年以前」、同「樺太アイヌ民族誌—伝統と現代」、北原次郎太「樺太アイヌの歴史」、長谷部一弘「樺太アイヌの衣・食・住」、内田祐一「樺太アイヌの信仰と生活」、小西雅徳「東京人類学会と樺太調査行」、同「八戸と石田収蔵」などの論考が掲載された。

2011年には、板橋区立郷土資料館にて企画展「明治・大正期の人類学・考古学者伝—学者たちの絵葉書・絵手紙の世界」が開催された。石田収蔵宛ての同時代の研究者からの絵葉書や絵手紙のほか、石田自らが描いて妻や自分宛てに送ったものも含まれており、調査時の様子などを髣髴とさせる（守屋編 2011）。また、石田収蔵を含む40人の研究者の調査歴、業績を一覧にし、絵葉書や絵手紙を掲載した資料集がまとめられており、基礎的な資料と位置付けられる（守屋編 2012）。これらは、東京人類学会の石田収蔵の業績が約100年ぶりに再評価されるきっかけとなった。

1995年、北海道大学文学部古河講堂で数体の頭骨が確認されたうち、1体に「オタスの杜風葬オロッコ」と書かれてあったことから、サハリンから持ち出された経緯を調べるべく、報告書として樺太日日新聞（北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題

調査委員会 2004) や北海タイムス (田口編 2006) に掲載されたサハリン先住民族に関する新聞記事がまとめられた。

音楽家の千葉伸彦は、五弦琴に関して残された音源や映像から検討を始めている (千葉 1996)。

1998年、金子亨、荻原眞子、中川裕らの教員で構成されていた千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座が『千葉大学ユーラシア言語文化論集』の発行を開始して現在に至っている。第1号で中川裕は、ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館 (通称: クンストカメラ, MAE) 収蔵の物質資料のアイヌ語名称の記録を検討している (中川 1998: 67-109)。その他、主な関係論文を挙げる。丹菊逸治「アイヌ語樺太西海岸方言の rV 音節で終る動詞について」 (丹菊 1998: 222-234)。「アイヌ文化調査ノート (1) — 新聞地方」は、多田 (高屋) ヨネからの生活全般にわたる聞き取りをまとめて報告している (多田・田村 1999: 137-162)。北原次郎太「<資料報告> 沼端ウメ 口述・和田文治郎 筆録『貧しき子婿選びの試験にパスして女を得る』」 (北原 2001: 44-59)。田村将人「(覚え書) 樺太アイヌにおけるイヌの『供犠』」は、北海道アイヌには見られない事象でニヅフとの関係がみられる供犠を紹介している (田村 2001b: 168-186)。荻原眞子 (解説)、丹菊逸治 (翻刻・訳注)「<資料> 千徳太郎治のピウスツキ宛書簡 — 『ニシパ』 へのキリル文字の手紙」は、1905年以降に内淵の千徳太郎治がキリル文字表記のアイヌ語樺太方言でピウスツキに宛てた書簡を翻刻しており、当時の日露関係や樺太アイヌの生活の大きな変化を読み取ることができる (荻原解説、丹菊翻刻・訳注 2001: 187-226)。田村将人「樺太庁による樺太アイヌの集住化」は、北海道アイヌとは異なった画一的な集住政策と漁業政策との関わりを論じている (田村 2002: 224-249)。北原次郎太「(覚え書き) 樺太アイヌの火神の祭壇」は、北海道を含めて広く火の神のイナウ (木幣) に関する比較研究である (北原 2002: 72-96)。北原次郎太「トンコリの戦後史 2 — 1977年~1998年まで」 (北原 2003b: 67-94) は、「トンコリの戦後史 — 1945年~1977年を中心に」 (北原 2003a: 9-18) に続くもので、トンコリ (五弦琴) の制作者、使用状況、また伝承のあり方等に触れている。歌謡、舞踊、演奏等を整理したもので、樺太アイヌの文化のイメージの変遷をたどることもできる。北原次郎太「木幣制作技術の復元 — 形状・加工痕」は信仰の道具であるイナウ (木幣) を各博物館の収蔵資料をもとに分析した論考である (北原 2004: 68-98)。北原次郎太「火の神の夫 — apekamuy・cisekorkamuy・cisekamuy」は家を司る神や家の木幣などと呼ばれる一群と火の神の関係を明らかにした論考である (北原 2008: 105-142)。田村将人「二種類の『樺太土人旧慣調書』について」は日本領樺太において裁判所等が発行した慣習法をまとめたもので、同時期の北海道と法的な位置づけが異なっていたことを示した (田村 2008a: 143-169)。

北原次郎太、丹菊逸治、田村将人は、サハリンで1910~1930年代に生まれた樺太アイヌ 4人からの聞き取りの情報をまとめている (北原他 2000)。北原ら 3人はその後も樺

太アイヌに関する調査研究を継続している。北原は、儀礼の道具であるイナウ（木幣）について学位論文をまとめ成果を出版し（北原 2014）、さらに「樺太アイヌのヌソ（犬ぞり）」を型式、装具、操縦法などをまとめている（北原 2019: 254-277）。

ロシア科学アカデミー極東支部極東歴史学考古学民族学研究所が編集しているシリーズ『民族と文化 北東シベリアの諸民族』（Турасв 2010）にはV.トゥライエフがアイヌ民族に関する概説として一章を執筆している。

ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館のアンドレイ・ソコロフは、『アイヌ民族—起源から現代まで アイヌの民族性の形成史の諸資料』（Соколов 2014）を民族形成の過程、伝統社会の歴史的な発展、伝統的な生業、精神文化、武具、物質文化などの章に分けてまとめている。ロシア語の文献のみならず、日本側の諸資料を積極的に活用しているところからも、ロシア側でアイヌ文化研究を行う第一人者といえる。

樺太アイヌ自身による調査や自伝もいくつか出版されている。2001年に田中美恵子、田澤守によって結成された樺太アイヌ協会は、1991年にサハリン州郷土博物館で開催された特別展「ピウスツキ—サハリン諸民族の研究者」の展示資料について、写真や図版入りで『樺太アイヌの伝統文化—ピウスツキ・コレクションより』（2002年）を出版している。田澤守、榎木貴美子、河野本道は『樺太アイヌの稚咲内移住に関する研究調査—概報1』（田澤・榎木・河野 2011）をまとめている。この豊富町稚咲内は1945年以降に樺太アイヌが多く集まった移住先であるが、詳細は分かっていたいなかったことから今後の継続的な調査が望まれる。また近年は舞踊の再現も行われている（岩澤・田澤・松永・百瀬 2020）。

西海岸の小田洲にルーツを持つ北原きよ子は、北海道に生まれ、関東に移住し関東ウタリ会会長を務め、富田友子からトンコリを習得するなど活動してきた。2013年に自伝『わが心のカツラの木—滅びゆくアイヌといわれて』（北原 2013）を出版している。

1933年落帆で生まれ育った安部洋子は、サハリンから北海道、関東へ移住してきた間のことを俳句と文章で綴った自伝を出版しており（安部・橋田編 2015）、田村将人が安部の家族の歴史に関する解説を付している（田村 2015: 227-248）。

1995年以降を振り返ると、樺太アイヌの言語や文化に関する新たな調査が難しい現状をふまえて、20世紀をとおして調査された内容の再吟味が多いことが特徴である。また、博物館に収蔵される物質資料の詳細な調査や、言語や文学のデータを再検討することが主な研究となっていることが分かる。

その中であって、2020年北海道白老町に開館した国立アイヌ民族博物館では、表記の第一にアイヌ語を掲示する方針が掲げられ、中にはアイヌ語樺太方言による解説文がある。また、北原次郎太らによる調査、復元によって樺太アイヌの仔クマつなぎ杭が同館で展示されている。日口の博物館における収蔵資料の熟覧や、写真資料の観察によって技術が復元され、展示に活用されていることも21世紀初頭の特徴と言える。

8 まとめ

冒頭でも触れたように、樺太アイヌに関する研究は日露／日ソ／日ロ関係が密接にかかわっている。すなわち、19世紀から1905年までは帝政ロシア領下において記録されたロシア語文献が多いことがわかる。1905～1925年は日本統治下において、初期の東京人類学会に代表される訪問型の調査研究から、1925～1945年は滞在型の調査研究が多くの成果を取め、研究の基礎を築いた。1945年以降、〈故地〉を離れ北海道に移住した樺太アイヌのもとを訪れての研究が、戦前の研究を継承していた。1975年以降は、北見市常呂町や網走市の例を見るように、地元密着型ともいえるような文化伝承と調査報告・研究の融合が見られ、また北海道対雁への強制移住の遺族が犠牲者の慰霊祭を始めた時期でもあった。1985年ソ連のペレストロイカ以降はソ連国内でアイヌ研究が盛んになったことに加えて、ピウスツキの蠟管を象徴するように日本とポーランド、また日ソ／日ロの共同研究が進んだ時期だった。1995年以降は、ロシア国内の博物館に収蔵されている物質資料の悉皆調査が行われ、その成果として日本国内でも目録が出版され、さらに展覧会への資料出品という形で活用された。また、当事者による樺太アイヌ協会の立ち上げをはじめ、自伝の出版などが相次いだ。

現在、アイデンティティを表明している人がいないと思われる千島アイヌに関しては、伝承あるいは技術の復元などは知られていない状況と言える。一方、北海道アイヌに関しては、各地における文化伝承、文化復興の動きが文化人類学的関心から調査が行われていることと対照的である。国際関係による国境の変遷、さらにいわゆる同化政策等によって独自の文化伝承をあきらめざるを得なかった各地のアイヌ文化の現代的な様相にも大きな違いがあることが分かる。

参考文献

<和文>

アイヌ文化保存対策協議会編

1970 『アイヌ民族誌』東京：第一法規。

アイヌ民族博物館

1985 『北方民族展—ウィルタ・ニブヒ・千島アイヌ・樺太アイヌ』白老：アイヌ民族博物館。

1987 『ソビエト連邦極東少数民族展—サハリンアイヌを中心として』白老：アイヌ民族博物館。

1996 『樺太アイヌ—児玉コレクション』白老：アイヌ民族博物館。

2006 『トンコリを中心とした西平ウメの伝承及びトンコリの総合的研究報告書』白老：アイヌ民族博物館。

秋月俊幸

1994 『日露関係とサハリン島—幕末明治初年の領土問題』東京：筑摩書房。

浅井タケ口述，村崎恭子編訳

1989 『樺太アイヌ語口承資料1』札幌：北海道大学。

1995 『樺太アイヌ語口承資料2』札幌：北海道大学。

1999a 『浅井タケ昔話全集I』横浜：横浜国立大学。

1999b 『浅井タケ昔話全集II』横浜：横浜国立大学。

2001 『樺太アイヌの昔話 TUYTAH』東京：草風館。

朝倉利光・伊福部達編

1986 『ピウスツキ録音蠟管研究の歩み』札幌：北海道大学応用電気研究所。

網走市立郷土博物館

1983 『収蔵資料目録—民族編』網走：網走市立郷土博物館。

安部洋子・橋田欣典編

2015 『オホーツクの灯り—樺太，先祖からの村に生まれて』札幌：クルーズ。

石田収蔵

1908a 「樺太紀行（上）」『東京人類学会雑誌』265: 257-266。

1908b 「樺太紀行（中）」『東京人類学会雑誌』266: 302-305。

1908c 「樺太紀行（下）」『東京人類学会雑誌』267: 341-346。

1909a 「樺太アイヌの熊送」『東京人類学会雑誌』274: 133-136。

1909b 「樺太雑観（上）」『東京人類学会雑誌』283: 32-34。

1909c 「樺太雑観（下）」『東京人類学会雑誌』284: 71-73。

稲子恒夫

2007 『ロシアの20世紀—年表・資料・分析』東京：東洋書店。

犬飼哲夫・芳賀良一

1957 「樺太犬考（一）」『北方文化研究報告』12: 43-58。

犬飼哲夫・竹内忝・芳賀良一

1958 「樺太犬考（二）」『北方文化研究報告』13: 35-52。

井上絃一

2018 『プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌—二十世紀初め前後のエンチウ，ニヅフ，ウイルタ』（東北アジア研究センター叢書63）仙台：東北大学東北アジア研究センター。

稲生典太郎

1997 『北方文化の考古土俗学』東京：岩田書院。

岩澤孝子・田澤守・松永康佑・百瀬響

2020 『モーションキャプチャおよびCG技術による樺太アイヌ古式舞踊の再現』岩見沢：北海道教育大学岩見沢校。

ヴィシネフスキー，N.

2006 『トナカイ王—北方先住民のサハリン史』小山内道子訳，東京：成文社。

ウイルタ協会資料館運営委員会編

2002 『北方少数民族資料館—ジャッカ・ドフニ展示作品集』（改訂版）網走：ウイルタ協会。

内田祐一

2000 「MAE(ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館)所蔵の樺太アイヌ資料について」『環オホーツク』7: 51-63。

SPb- アイヌプロジェクト調査団

1998 『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』東京：草風館。

榎森進

2013 「『日露和親条約』がカラフト島を両国の雑居地としたとする説は正しいか？」『東北文化研究所紀要』45: 1-22。

大塚和義

1987 「サハリン州郷土博物館のピウスツキ資料」加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』（国立民族学博物館研究報告別冊第5号）pp. 131-143, 大阪：国立民族学博物館。

大貫恵美子

1979 「南樺太北西海岸のアイヌの生活」知里眞志保・山本祐弘・大貫恵美子『樺太自然民族の生活』東京：相模書房。

1980 「文化と分類—アイヌの空間観念を例として」『思想』676: 26-45。

2021 『樺太アイヌ民族説—その生活と世界観』阪口諒訳, 東京：青土社。

岡正雄・馬場脩

1979 「北千島古守島及び樺太多来加地方に於ける考古学的調査予報」馬場脩『樺太千島考古・民族誌2』pp. 174-261, 札幌：北海道出版企画センター（初出は1938年）。

荻原眞子

2000 「B. ピウスツキのサハリン紀行」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6: 219-240。

2004 「V. N. ヴァシーリエフ『エゾおよびサハリン島アイヌ紀行』」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』10: 153-177。

荻原眞子・古原敏弘

2002 『ロシア・アイヌ資料の総合調査研究—極東博物館のアイヌ資料を中心として』千葉：千葉大学文化部。

2010 「アイヌのクマ送り関係資料概要—ペテルブルグの博物館所蔵品について」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』16: 117-142。

2011 「アイヌの魚皮衣—ロシアの博物館所蔵のアイヌコレクションについて」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』17: 91-122。

2012 「アイヌの犬橇関係資料概要—ロシアの博物館所蔵品について」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』18: 91-114。

荻原眞子／古原敏弘／V. ゴルパチョーヴァ編

2007 『ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』東京：草風館。

荻原眞子解説, 丹菊逸治翻刻・訳注

2001 「〈資料〉千徳太郎治のピウスツキ宛書簡—『ニシパ』へのキリル文字の手紙」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4(2001): 187-226。

葛西猛千代

1975a 『樺太アイヌの民俗』札幌：みやま書房（初出は1943年）。

1975b 『樺太土人研究資料』私家版（初出は1928年）。

加藤九祚・小谷凱宣編

1987 『ピウスツキ資料と北方諸民族文化の研究』（国立民族学博物館研究報告別冊第5号）大阪：国立民族学博物館。

加藤克編

2008 『北大植物園資料目録6 アイヌ民族資料目録』札幌：北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園。

金谷栄二郎・宇田川洋

1986 『樺太アイヌのトンコリ』常呂：常呂町郷土史研究同好会。

1989 『樺太アイヌの板舟』常呂：常呂町郷土史研究同好会。

樺太アイヌ史研究会編

1992 『対雁の碑—樺太アイヌ強制移住の歴史』札幌：北海道企画出版センター。

菊池俊彦編

1997 『北の民俗誌—サハリン・千島の民族』（日本民俗文化資料集成第23巻）東京：三一書房。

北原きよ子

2013 『わが心のカツラの木—滅びゆくアイヌといわれて』東京：岩波書店。

北原次郎太

2001 「〈資料報告〉沼端ウメ 口述・和田文治郎 筆録『貧しき子婚選びの試験にパスして女を得る』」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4(2001): 44-59。

2002 「(覚え書き) 樺太アイヌの火神の祭壇」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』5(2002): 72-96。

2003a 「トンコリの戦後史—1945年～1977年を中心に」『千葉大学社会文化科学研究』7: 9-18。

2003b 「トンコリの戦後史2—1977年～1998年まで」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』6(2003): 67-94。

2004 「木幣制作技術の復元—形状・加工痕」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』7(2004): 69-88。

2008 「火の神の夫—apekamuy・cisekorkamuy・cisekamuy」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』10(2007): 105-142。

2014 『アイヌの祭具イナウの研究』札幌：北海道大学出版会。

2019 「樺太アイヌのヌソ(犬ぞり)」大石高典・近藤社秋・池田光穂編『犬からみた人類史』pp. 254-277, 東京：勉誠出版。

北原次郎太編

2013 『和田文治郎 樺太アイヌ説話集(1)』札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

2014 『和田文治郎 樺太アイヌ説話集(2)』札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

北原次郎太・丹菊逸治・田村将人

2000 『樺太アイヌ文化調査報告書』私家版, 千葉。

金田一京助

2004 「片言をいうまで」『ユーカーラの人びと—金田一京助の世界1』pp. 10-19, 東京：平凡社ライブラリー。

久保寺逸彦

2004 「アイヌの音楽と歌謡」『久保寺逸彦著作集②アイヌ民族の文学と生活』pp. 9-40, 東京：草風館。

河野広道

1971a 「墓標の型式より見たるアイヌの諸系統」河野広道著作集刊行会編『北方文化論』(河野広道著作集I) pp. 52-81, 札幌：北海道出版企画センター(初出は1931年)。

1971b 「樺太の旅」(I-II) 河野広道著作集刊行会編『北方文化論』(河野広道著作集I) pp. 132

-152, 札幌: 北海道出版企画センター (初出は1933年)。

河野本道

- 1979 『北方の民具2 —エンチュ(カラフト・アイヌ)の物質文化』札幌: 北海道出版企画センター。
 1999 「エンチュ(カラフト=アイヌ)の人口と居住域の推移」『アイヌ—その認識』pp. 143-163, 札幌: 北海道出版企画センター。

小谷凱宣・萩原真子編

- 2004 『海外アイヌ・コレクション総目録』名古屋: 南山大学人類学研究所。

児玉作左衛門・伊藤昌一

- 1939 「アイヌの文身の研究」『北海道帝国大学 北方文化研究報告』2: 125-236。
 1940 「樺太アイヌの文身の研究」『北海道帝国大学 北方文化研究報告』3: 163-208。
 1941 「アイヌの髪容の研究」『北海道帝国大学 北方文化研究報告』5: 1-88。
 1942 「アイヌの髪容の研究補遺」『北海道帝国大学 北方文化研究報告』6: 81-140。

小西雅徳

- 1998 「石田収蔵の南樺太調査行について」野村崇先生還暦記念論集編集委員会編『北方の考古学』pp. 499-510, 富良野: 野村崇先生還暦記念論集編集委員会。

小西雅徳編

- 2000 『石田収蔵—謎の人類学者の生涯と板橋』(特別展図録) 東京: 板橋区立郷土資料館。

古原敏弘

- 2001 「金城朝永日記(抄)」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』7: 189-224。

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

- 1998 『サハリンアイヌの生活文化』札幌: 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
 2004 『樺太アイヌ民族誌』札幌: 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
 2005 『ロシア民族学博物館アイヌ資料展』札幌: 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
 2012 『収蔵品目録7 石田収蔵旧蔵写真』札幌: 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
 2013 『ロシアが見たアイヌ文化—ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館のコレクションより』札幌: 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。

阪口諒

- 2020 「『ツイシカリ・アイノ(対雁アイヌ)』—J. M. デイクソン著, 1882年, 東京」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』21(2019): 263-293。
 2021a 「『アイヌ語ロシア語辞典』中のアイヌ語樺太方言テキスト」『千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書』358: 43-55。
 2021b 「『アイヌ語ロシア語辞典』のアイヌ語話者に関する情報」『北方人文研究』14: 123-133。

先川信一郎

- 1987 『ロウ管の歌—ある樺太流刑者の足跡』(道新選書2) 札幌: 北海道新聞社。

佐々木弘太郎

- 1969 『樺太アイヌ語地名小辞典』札幌: みやま書房。

佐々木史郎

- 1996 『北方から来た交易民—絹と毛皮とサンタン人』東京: 日本放送出版協会。

佐々木利和

- 2001 「久保寺逸彦—その研究と方法」佐々木利和編『久保寺逸彦著作集①アイヌ民族の宗教と儀礼』pp. 363-372, 東京: 草風館。

佐藤忠悦

2020 『南極に立った樺太アイヌ—白瀬南極探検隊秘話』東京：青土社。

更科源蔵

1968 『アイヌ—歴史と民俗』東京：社会思想社。

1981a 『更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅰ アイヌ伝説集』札幌：みやま書房。

1981b 『更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅱ アイヌ民話集』札幌：みやま書房。

1981c 『更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅲ アイヌの神話』札幌：みやま書房。

1982a 『更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅳ アイヌの民俗（上）』札幌：みやま書房。

1982b 『更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅴ アイヌの民俗（下）』札幌：みやま書房。

1982c 『更科源蔵アイヌ関係著作集Ⅶ アイヌ文学の謎』札幌：みやま書房。

更科源蔵・更科光

1976a 『コタン生物記Ⅰ—樹木・雑草篇』東京：法政大学出版局。

1976b 『コタン生物記Ⅱ—野獣・海獣・魚族篇』東京：法政大学出版局。

1977 『コタン生物記Ⅱ—野鳥・水鳥・昆虫篇』東京：法政大学出版局。

沢田和彦

2020 『プロニスワフ・ピウスツキ伝—〈アイヌ王〉と呼ばれたポーランド人』開成：成文社。

篠原智花・笹倉いる美

2007 「北海道立北方民族博物館所蔵の田辺尚雄氏樺太調査関連資料について（1）」『北海道立北方民族博物館研究紀要』16: 77-98。

市立函館博物館編

1971 『馬場コレクション カラフト・アイヌ展目録 国指定重要民俗資料』函館：市立函館博物館。

1974 『国指定重要民俗資料「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第1篇 カラフトアイヌのひげべら』函館：市立函館博物館。

1976 『国指定重要民俗資料「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第2篇 北海道アイヌのひげべら』函館：市立函館博物館。

1977 『国指定重要民俗資料「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第3編 アイヌの喫煙具』函館：市立函館博物館。

1978 『国指定重要民俗資料「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第4編 アイヌの服飾品』函館：市立函館博物館。

1979 『国指定重要民俗資料「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第5編 アイヌの狩猟用具・その他』函館：市立函館博物館。

末永雅雄・伊東信雄

1979 『挂甲の系譜』東京：雄山閣。

杉村孝雄

1995 『樺太・遠景と近景—歴史のはざまと暮らしの素顔』私家版，札幌市。

2000 『樺太 暮らしの断層—遠景と近景・第二集』私家版，札幌市。

須藤武子他

1985 『カラフトアイヌ古式舞踊』東京：日本民俗舞踊研究会。

千徳太郎治

1929 『樺太アイヌ叢話』東京：市川商店。

タクサミ, Ch. M./コーサレフ, V. D.

1998 『アイヌ民族の歴史と文化—北方少数民族学者の視座より』熊野谷葉子訳, 中川裕監修, 東京: 明石書店。

田口正夫編

2006 『「北海タイムス」掲載のサハリン及び北海道先住民族に関する記事データベース』札幌: 北海道大学大学院文学研究科。

田澤守・榎木貴美子・河野本道

2011 『樺太アイヌの稚咲内移住に関する研究調査—概報1』豊富: 樺太アイヌ協会。

多田ヨネ口述・田村将人訳注

1999 「アイヌ文化調査ノート (1) — 新聞地方」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』2: 137-162。

田中了編

1980 『資料館ジャッカ・ドフニ展示作品集』網走: ウイルタ協会資料館運営委員会。

谷本一之

1958 「アイヌの五弦琴」『北方文化研究報告』13: 243-270。

2000 『アイヌ絵を聴く変容の民族音楽誌』札幌: 北海道大学出版会。

2006 『北方民族 歌の旅』札幌: 北海道新聞社。

田村将人

2001a 「樺太アイヌにおける犬の『供犠』」『環オホーツク』8: 75-85。

2001b 「(覚え書) 樺太アイヌにおけるイヌの『供犠』」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4: 168-186。

2002 「樺太庁による樺太アイヌの集住化」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』5: 224-249。

2003 「『もんべつ流水まつり』における樺太アイヌの芸能活動に関する新聞資料」『itahcara』2: 42-48。

2006 「20世紀前半のある樺太アイヌ村落の歴史的な位置づけ」『北海道開拓記念館研究紀要』34: 113-128。

2008a 「二種類の『樺太土人旧慣調書』について」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』10: 143-169。

2008b 「樺太アイヌの〈引揚げ〉」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』pp. 463-502, 東京: 不二出版。

2013a 「異民族に関する法律作成についてのサハリン島武官知事官房ファイルに見るピウスツキの事績」沢田和彦編『ポーランドの民族学者プロニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』pp. 113-129, 浦和: 埼玉大学教養学部・文化科学研究科。

2013b 「サハリン先住民族ウイルタおよびニヅフの戦後・冷戦期の去就—樺太から日本への〈引揚げ〉とソビエト連邦での〈残留〉, そして〈帰国〉」蘭信三編『帝国以後の人の移動—ポストコロニアリズムとグローバリズムの交差点』pp. 209-248, 東京: 勉誠出版。

2014 「鳥居龍蔵の樺太庁囑託としての1912年サハリン調査」ヨーゼフ・クライナー編『日本とはなにか—日本民族学の20世紀』pp. 55-77, 東京: 東京堂出版。

2015 「樺太アイヌのこの150年間—安部洋子さんの家族の歴史」安部洋子著, 橋田欣典編『オホーツクの灯り—樺太, 先祖からの村に生まれて』pp. 227-248, 札幌: クルーズ。

2017 「サハリン先住民族の文化と観光網走」『環北太平洋地域の伝統と文化 1 サハリン』(第31回北方民族文化シンポジウム網走報告書) pp. 33-37, 網走: 北方文化振興協会。

丹菊逸治

- 1998 「アイヌ語樺太西海岸方言の-rV 音節で終る動詞について」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』1: 222-234。

千葉伸彦

- 1996 「藤山ハルのトンコリ演奏法について (1)」萩中美枝・宇田川洋編『北海道東部に残る樺太アイヌ文化 I』pp. 9-37, 常呂: 常呂町樺太アイヌ文化保存会。

知里真志保

- 1948 「樺太アイヌの説話」『民族学研究』12(4): 328-338。
1953 「樺太アイヌの神話」『北方文化研究報告』8: 185-245。
1955 「アイヌの散文物語」『北方文化研究報告』10: 251-319。
1973a 「樺太アイヌの説話 (一)」『知里真志保著作集 (1)』pp. 251-372, 東京: 平凡社 (初出は1944年)。
1973b 「アイヌ語法研究—樺太方言を中心として」『知里真志保著作集 (3)』pp. 455-586, 東京: 平凡社 (初出は1942年)。
1975 「分類アイヌ語辞典 人間篇」『知里真志保著作集 別巻 II』東京: 平凡社 (初出は1954年)。
1976 「分類アイヌ語辞典 植物篇・動物篇」『知里真志保著作集 別巻 I』東京: 平凡社 (初出は植物篇1953年, 動物篇1962年)。

知里真志保・山本利雄

- 1943 「樺太アイヌ民具解説」『樺太庁博物館報告』5(1): 81-110。

知里真志保・和田文治郎

- 1943 「樺太アイヌ語に於ける人体関係名彙」『樺太庁博物館報告』5(1): 39-80。

帝国学士院編

- 1944 『東亜民族名彙』東京: 帝国学士院。

寺田吉孝訳

- 1995 「アイヌ語・ロシア語辞典 1」『北海学園大学学園論集』84: 75-88。

東京国立博物館

- 1992 『東京国立博物館図版目録 アイヌ民族資料篇』東京: 東京国立博物館。

富田歌萌

- 1965 「アイヌの弦楽器 “トンコリ”」『北海道の文化』10: 1-24。

富田友子

- 2012 『西平ウメ伝承トンコリ楽曲集』札幌: 北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

鳥居龍蔵

- 1976a 「黒竜江と北樺太」鳥居龍蔵『鳥居龍蔵全集 (8)』pp. 281-330, 東京: 朝日新聞 (初出は1943年)。
1976b 「考古学民族学研究・千島アイヌ」鳥居龍蔵, 小林知生訳『鳥居龍蔵全集 (5)』pp. 311-554, 東京: 朝日新聞社 (初出は1919年)。

中川裕

- 1998 「ペテルブルグMAEコレクションのアイヌ語資料」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』1: 67-109。

名取武光

- 1959 「樺太千島のイナウとイトツパ」『北海道大学北方文化研究報告』14: 43-78。

- 1974 「ギリヤークとオロッコの幣と刻印」『アイヌと考古学（二）名取武光著作集Ⅱ』pp. 269-275, 札幌：北海道出版企画センター。
- 西鶴定嘉
1941 『樺太の栞』（樺太叢書6）豊原：樺太文化振興会。
1942 『樺太アイヌ』豊原：樺太文化振興会。
- 日本放送協会
1965 『アイヌ伝統音楽』東京：日本放送出版協会。
- 能仲文夫
1933 『北蝦夷秘聞—樺太アイヌの足跡』豊原：北進堂。
- 萩中美枝
1984 「トコロからのレポート」『北海道の文化』50: 45-47。
1985 「常呂からのレポート（2）オйна その1」『北海道の文化』52: 16-20。
1986 「常呂からのレポート（3）オйна その2」『北海道の文化』54: 32-35。
1992 「樺太地方・金谷フサさんの暮らしと食べもの」『日本の食生活全集48 聞き書 アイヌの食事』pp. 142-153, 東京：農文協。
- 萩中美枝・宇田川洋編
1996 『北海道東部に残る 樺太アイヌ文化Ⅰ』常呂：常呂町樺太アイヌ文化保存会。
- 萩中美枝・畠山歌子・金谷フサ・宇田川洋・宇田川倫
1987 『アイヌ衣服調査報告書（Ⅱ）—樺太アイヌが伝承する衣文化1』札幌：北海道教育庁。
1988 『アイヌ衣服調査報告書（Ⅲ）—樺太アイヌが伝承する衣文化2』札幌：北海道教育庁。
1989 『アイヌ衣服調査報告書（Ⅳ）—樺太アイヌが伝承する衣文化3』札幌：北海道教育庁。
- 服部四郎
1961 「アイヌ語カラフト方言の『人称接辞』について」『言語研究』39: 1-20。
- 服部四郎編
1964 『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店。
- 服部四郎・知里眞志保
1960 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『民族学研究』24(4): 307-342。
- 馬場脩
1979a 『北方民族の旅』札幌：北海道出版企画センター。
1979b 『樺太・千島考古・民族誌』全3巻, 札幌：北海道出版企画センター。
- ばふんけ・あといさらんで・しべけんにし口述, 青山樹三郎編
1918 『極北の別天地 あいぬ生活と樺太事情』東京：豊文社。
- ばふんけ・あといさらんで・しべけんにし説述, 青山東園編
1920 『極北の別天地 樺太案内』東京：広文社。
- ビウスツキ, B.
2012 「サハリン島におけるアイヌの経済生活概説」兎内勇津流訳『環オホーツクの環境と歴史』1: 47-62。
2013 「サハリン島の個々のアイヌ村についてのいくつかの資料」兎内勇津流訳『環オホーツクの環境と歴史』2: 75-98。
- 福山惟吉・知里眞志保
1943 「樺太アイヌ語植物名彙（一）—白浜に於ける調査（上）」『樺太庁博物館報告』5(1): 3-37。

藤村久和

- 1983 「B・ピウスツキ／樺太アイヌの言語と民話についての研究資料1」『創造の世界』46: 99-119。
1984 「河野広道先生のアイヌ文化調査の足跡」『河野広道博士没後二十年記念論文集』pp. 33-42, 札幌: 北海道出版企画センター。
1985 「アイヌ語は生き残るか」『言語』14(2): 36-41。

藤村久和・平川善祥・山田悟郎編

- 1973a 『民族調査報告書 資料編Ⅰ』札幌: 北海道開拓記念館。
1973b 『民族調査報告書 資料編Ⅱ』札幌: 北海道開拓記念館。

藤村久和・若月亨編

- 1994 『ヘンケとアハチ』札幌: 札幌テレビ放送株式会社 (STV)。

ブッセ, N.

- 2003 『サハリン島古領日記1853-54 ロシア人の見た日本人とアイヌ』(東洋文庫715) 秋月俊幸訳, 東京: 平凡社。

麓慎一

- 2017 「19世紀後半における日露関係とサハリン島の諸民族」『環北太平洋地域の伝統と文化 1 サハリン』(第31回北方民族文化シンポジウム網走報告書) pp. 27-32, 網走: 一般財団法人北方文化振興協会。

プロコーフィエフ, M.

- 2014 「サハリン州郷土博物館における南サハリンアイヌのコレクション—収集と研究の歴史から」荻原眞子・古原敏弘訳『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』20: 167-181。

北海道開拓記念館

- 1981 『北海道開拓記念館収蔵資料分類目録1 民族Ⅰ』札幌: 北海道開拓記念館。
1990 『更科源蔵氏資料目録』札幌: 北海道開拓記念館。

北海道教育委員会

- 1968 『アイヌ民俗資料調査報告』札幌: 北海道教育委員会。

北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会

- 2004 『古河講堂「旧標本庫」人骨問題報告書Ⅱ』札幌: 北海道大学。

北海道立北方民族博物館編

- 2018 『北海道立北方民族博物館資料目録13 岡正雄・馬場脩 千島・樺太アルバム』網走: 北海道立北方民族博物館。

増田又喜

- 1996 『アイヌ歌謡を尋ねて—私の場合』東京: 近代文芸社。
2010 『アイヌのふるさとに歌を求めて』東京: 文芸社。

三上マリ子

- 1986 『アイヌ衣服調査報告書(Ⅰ)—アイヌ女性が伝承する衣文化』札幌: 北海道教育委員会。

村崎恭子

- 1967 「アイヌ語カラフトライチシカ方言シンタクス」『言語研究』50: 100-120。
1976 『カラフトアイヌ語』東京: 国書刊行会。
1979 『カラフトアイヌ語 文法篇』東京: 国書刊行会。

守屋幸一編

- 2011 『明治・大正期の人類学・考古学者伝——学者たちの絵葉書・絵手紙の世界』東京：板橋区立郷土資料館。
- 2012 『明治・大正期の人類学・考古学者伝 板橋区立郷土資料館所蔵 石田収蔵氏旧蔵はがき資料集』東京：板橋区立郷土資料館。

山辺安之助

- 2021[1913] 『あいぬ物語』金田一京助編，東京：青土社。

山本祐弘

- 1943a 『樺太原始民族の生活』東京：アルス。
- 1943b 『樺太アイヌの住居』東京：相模書房。
- 1949 「北土の神衆——南樺太におけるギリヤーク・オロッコのシャーマン」『民族学研究』14(1): 36-50。
- 1968 『北方自然民族民話集成』東京：相模書房。
- 1970 『樺太アイヌ・住居と民具』東京：相模書房。
- 1979 『樺太自然民族の生活』東京：相模書房。

吉田千萬

- 1997a 『樺太（サハリン）・千島の先住民族文献 和文編——明治元（1868）～昭和20（1945）年』（環オホーツク叢書1）紋別市：北の文化シンポジウム実行委員会。
- 1997b 「資料に見る樺太（サハリン）」『環オホーツク』4: 82-92。

和田完

- 1958 「南樺太土着民における偶像」『北方文化研究報告』13: 205-242。
- 1959 「樺太アイヌの偶像」『北方文化研究報告』14: 43-78。
- 1961 「プロニスラフ・ピルスツキ著——樺太アイヌのシャーマニズム」『北方文化研究報告』16: 179-203。
- 1964 「アイヌ語病名について——和田文治郎遺稿 1」『民族学研究』29(2): 99-112。
- 1973 「知里先生のこと」『知里真志保著作集 月報』pp. 5-8, 東京：平凡社。
- 1999 『サハリン・アイヌの熊祭——ピウスツキの論文を中心に』東京：第一書房。

<欧文>

Majewicz, A. F. (ed.)

- 1998 *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski Volume 1*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Ohnuki-Tierney, E.

- 1981 *Illness and Healing among the Sakhalin Ainu*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 1984 *The Ainu of the Northwest Coast of Southern Sakhalin*. Illinois: Waveland Press.

Pilsudski, B.

- 1998 Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore. In A. F. Majewicz (ed.) *The Collected Works of Bronislaw Pilsudski*, Volume 2, pp. 1-242. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

<露文>

Высоков, М. (ed.)

1988 *Айны: проблемы истории и этнографии*. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей.

Высоков, М. и О. Шубина

1987 *Этнографические исследования Сахалинского областного краеведческого музея*. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей.

Высоков, М., М. Ищенко, В. Шубин, и О. Шубина

1986 *Материалы к изучению истории и этнографии населения сахалинской области*. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей.

Высоков, М., Г. Высокова, и К. Черпакова

1991 *Труды Сахалинского областного краеведческого музея 1946–1990 гг. Библиографический указатель*. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей.

Добротворский, М. М.

1996 *Аинско-Русский Словарь*. Казань. In K. Refsing (ed.) *Early European Writings on the Ainu Language 3*. Richmond: Curzon.

Дударец, Г.

1995 *Исторические чтения труды Государственного архива Сахалинской области №1*. Южно-Сахалинск: Государственный архив Сахалинской области.

Жеребцов, Б. А.

1988 *Материалы исследований Б.А.Жеребцова по этнографии айнов Южного Сахалина (1946–1948)*. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей.

Жеребцов, Б. и М. Прокофиев

2012 *Материальная и духовная культура сахалинских айнов*. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей.

Латышев, В. и М. Прокофиев

1988 *Каталог этнографических коллекций Б. О. Пилсудского*. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей.

Латышев, В. и М. Ищенко

1993 *Б.О. Пилсудский: исследователь народов Сахалина (материалы международной научной конференции. 31 Октября- 2 Ноября 1991г. Южно-Сахалинск)* тт. 1–2. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей.

Прокофиев, М. (ed.)

2005 *Каталог коллекций Б. А. Жеребцова по этнографии айнов Южного Сахалина*. Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей.

Соколов, А.

2014 *Айны: от истоков до современности материалы к истории становления айнского этноса*. Санкт-Петербург: МАЭ РАН.

Тураев, В.

2010 айны. In Е. П. Батянова и В. А. Тураев (ed.) *Народы Северо-Востока Сибири (Народы и культуры)* Москва: Наука.